

図5 ウンガー=フラクトゥーア体

(a) A B C D E F G H I J K L M N O P Q
 R S T U V W X Y Z Ū Ū Ū
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z ä ö ü
 ch ð ff fi fl si ff ft ß ð

注) ß [ɛs-tsét エス・ツェット]は、長いs と丸いs または終わりのs とが合成した、いわゆる Ligatur (リガトゥーア)で、14世紀末に成立した。

(b1) Joachim Schildt

Kurze
 Geschichte
 der
 deutschen
 Sprache

(b2) Joachim Schildt

Kurze
 Geschichte
 der
 deutschen
 Sprache

注) ヨーアヒム・シルト (Joachim Schildt) の『ドイツ語小史』(*Kurze Geschichte der deutschen Sprache*, Berlin, 1991) は、書名に「ドイツ文字」を使用している。ただし、表紙 (b1) と扉 (b2) では字体を異にしており、表紙では Schwabacher、扉では Fraktur が用いられている。

Rudolf Koch, 1876~1934); *Ehmcke-Fraktur* (エームケ=フラクトゥーア体[1900] < Fritz Hel-muth Ehmcke, 1878~1965); *Zentener-Fraktur* (ツェンテナール=フラクトゥーア体[1937] < Fried-rich Hermann Ernst Schneidler, 1882~1956). 上にあげた字体の中からとくに重要なものとして、Unger-Fraktur (図5) と Koch-Fraktur, すなわち、Deutsche Fraktur (図6) をあげることができる。

【ドイツ筆記体 (deutsche Kurrent, deutsche Schreib-schrift)】印刷術の発明により西ヨーロッパは写本文化から活字文化へ大転換を遂げるが、筆記体は官庁文書体 (Kanzleischrift) として生き続け、書家を職とする者も少なくなかった。ドイツ筆記体を Kurrent (草書体) と命名したヨハン・ノイデルファー (父) や、習字法教本、通称《*Schreibbüchlein*》の著者ヴォルフガ

ング・フッガーの活躍はめざましかった。筆記体は16世紀に最高潮に達し、筆記具の進歩に伴い、新しい書体が次々に考案された。渦巻模様の凝った書体も現われて、文字の骨組みが分かりにくくなることも稀ではなく、ややもすれば文字本来の目的から逸出し、装飾本位に走る傾向すら生じた。しかし19世紀末になると、このような傾向に対し、学校教育の立場から書きやすく読みやすい標準的な書体を求める努力が払われるようになった。そのような標準的な書体の確立に貢献した代表的な書家として、ルードルフ・コッホ (Rudolf Koch) をあげることができる。コッホは4半世紀にわたって オッフエンバッハ美術工芸学校の教授を務め、いわゆる オッフエンバッハ書体 (Offenbacher Schrift), すなわち、ルードルフ・コッホ書体 (Rudolf-Koch-Schrift) を確立した。それは、長年の実地教育の結晶ともいべき